
自動殺人機

宝月藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自動殺人機

【Nコード】

N2563F

【作者名】

宝月藍

【あらすじ】

昼間は自動販売機、夜中の12時には、自動殺人機となる
これは、まことしやかな都市伝説

ねえ、知ってる？

なに？

3丁目の角の自動販売機のウワサ。

あ、知ってる。自動殺人機でしょ。

うん。夜中の12時になったら、人を殺してくれるんだって。

12時に、あそこに行つて殺したいヤツの名前を書いた紙を、お札のどこに入れるんだよね。

そう、そう。怖いよね。

こわいよね。あ、あのさ、英語の山地、行方不明のままじゃん？

もしかしたら、自動殺人機に殺されてたりして。

あー、あたしアイツ嫌いだな。

あ、あたしも。

殺してくれた人に、ちよつと感謝かも。

あはは、でも、それって超怖くない？

う、うん。やだっ、寒気がしてきた。

この話やめよ。

うん。

これは、とある都市伝説。

いつも、ずっと立っている自動販売機が、夜中の12時に、殺人機になる。

紙に名前を書かれた人は、必ず死ぬ。紙に名前を書いた人は、何の代償もない。ただ、殺人に手を染めてしまったことに苦しむだけ。苦しむ人もいれば、殺したことに何も感じない人だっている。

これからの、話は殺人機のことを知った、とある真面目な女子高生の話である。

「真帆、カラオケいこー」

「、ごめん。今日塾だから」

真帆は、少しうつむいて言った。

「ほら、真帆なんか誘っても無駄だって」

クラスメートの香織の声が真帆の耳に響く。

無駄

自分は無駄なんだ　そう思ってしまう。

塾も、好きで行ってるわけじゃない。親に言われて行っている。サボるとばれる。それが怖かった。結局親の言いなり。

塾に行く。

いつも、真帆は教室でも、塾でも一人だ。

「、あのさ、3丁目の自動殺人機のウワサ、知ってる？」

「あ、うん。お札の所に殺したいヤツの名前を書いた紙を夜中の1

2時に入れるんだっけ？」

「そうそう。なんかさ、×町の3丁目の角の自販らしいよ」

「あたし、やってみようか」

「バツカ！やめときな。殺人犯になるよ」

「大丈夫、殺したい人なんて、いないし」

後ろでそんな会話がきこえた。

×町の三丁目は、真帆の家の辺りだ。

真帆は、メモ帳の1ページを、切り取った。

そして、「山下香織」と書く。

塾が終わり、家に帰った。

夜11時45分、真帆は親が寝たのを確認し、さっきのメモを持って外に出た。

ウワサの自販機らしきものは、すぐに見つかった。

12時00分

真帆はお札の所に、メモを入れた。

メモは、吸い込まれる。

真帆は、急に怖くなって家に逃げるようにして、帰っていた。

翌日

香織が行方不明になったと、担任に告げられた。

真帆は、怖くてたまらなかった。

毎晩、香織に殺される夢を見るようになった。

そして1週間後、真帆は学校の屋上から飛び降りて、自殺した。

まるで、香織の祟りのように

自動殺人機

これを、もしも見つけたなら、あなたなら、使いますか？使いますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2563f/>

自動殺人機

2010年11月30日04時21分発行